

O-8 「ススキでふくろうが作りたい」ものづくりの再開

—脳卒中急性期における意味のある作業を基盤とした作業療法の実践—

○瀧 由紀子¹⁾

1) 鳥取県立中央病院

Keywords: 意味のある作業, 脳卒中, 急性期

【はじめに】

今回、視床出血による左片麻痺を呈した症例を担当した。当初は悲観的な発言が多かったが、リハビリ室の片隅の造花をみた一言からものづくりが好きであることが共有でき、「ススキでふくろうが作りたい」という希望が聞かれた。ススキのふくろう作りを実施し、精神的な安定が図れ、主体的に作業に取り組めるようになった。急性期病院において意味のある作業を基盤にし、生きがい・自分らしさの再獲得に至ったため報告する。なお、本報告は症例の同意を得ている。

【症例紹介】

A氏は70代男性。X年Y月Z日に右視床出血を発症し当院入院、Z+1日より作業療法開始。左不全麻痺BRSⅢ。ADLは食事・整容は非麻痺側を使用し一部介助、排泄は重度介助。病前のADLは自立し、息子と2人暮らしで家事の役割を担っていた。外出機会は毎日の畑仕事と自転車で近所のスーパーに買い物に行く程度。年に数回は祭りなど地域の行事に参加していた。手先が器用で、秋にはススキのふくろう、冬にはしめ飾りなどものづくりを長年続けていた。

【介入経過】

介入1週目、せん妄や抑うつ的な発言が聞かれリハビリの拒否あり。短期目標としてADLの拡大・再獲得を目指し、離床や促通訓練、排泄動作を中心としたADL訓練を開始したが自発性は乏しかった。Z+10日、リハビリ室の造花を見たA氏の「花がええ、造花でも生きたい。」という一言からものづくりが好きであると初めて共有。Z+17日、「ススキでふくろうが作りたい。」と希望し、ススキのふくろう作りを開始。最初はOTRが誘導することが多かったが、次第に主体的に取り組むようになった。他患やスタッフから声を掛けられ褒め言葉をもらい、笑顔も増えた。次第にA氏からもスタッフや他患に声をかけるようになり、離床時間も増加した。以降、「身のまわりの練習よりなんか作る方がええ。」「次は紙飛行機が作りたい。」等次々と希望が聞かれ、飛行機やクリスマスリース等のものづくりを継続。転院決定後、まとめとしてふくろう等の作品を持って写真を撮り、写真入れを作製。「励みにします。頑張ります。」と今後のリハビリに意欲的であった。Z+37日目に回復期リハビリテーション病院へ転院となった。

【考察】

A氏は長年自然と触れ合いながらものづくりを続けてきた。完成した作品は知人に送り、称賛・感謝されていた。ものづくりを通して人との繋がりを感じながら、ものづくりが得意なA氏という存在として、自分らしさや生きがいを持ち地域で生活されていたのではないだろうか。急性期は突然病や障害に直面し、精神的に不安定な状態に陥りやすい。治療が優先され、行動を制限されるため作業的不公正が生じやすい環境でもある。脳卒中発症によりものづくりが得意なA氏という存在が失われ世界から疎外されたことで、役割や生きがいを失った状態に置かれていた。A氏はススキのふくろう作りを通して、ものづくりがいかに大切な作業であるかを確認し、再びものづくりに参加できると認識できた。そして、他者から称賛を受ける機会を得たことで、患者のA氏ではなくものづくりが得意なA氏という存在として再認識され、生きがいの再獲得に至ったと考える。現在の急性期作業療法は機能訓練、ADL訓練といった介入が行われることが多い。急性期において、脳卒中患者の作業ニーズはADLに比べて患者固有の作業が多く挙げられたとの報告がある(三上ら2019)。作業療法士がクライアントを作業的存在として捉えようとすることで、些細な発言や反応から得られる情報に敏感になり、より大切な作業を共有することができると考える。

【最後に】

現在A氏は回復期リハビリテーション病院から自宅へ退院し、デイサービスに通いながらいきいきとものづくりを続けている。急性期からA氏の作業権を守り意味のある作業の共有と再獲得ができたことで、生きがいであるものづくりという作業の継続に繋げることができたのではないだろうか。